

Anosov automorphism の存在問題

名大 理学部 伊藤 清

序

Smale学派によて離散力学系の研究が進められて
いるが構造安定性の例として Anosov diffeomorphism が
重要視されている([Ni])。 Smaleの予想とは Anosov diffeo
morphism が位相的役を除けば代数的例につきるといふ
予想だがこの説明と 6 次元以下の代数的例を分類
した筆者の結果 [It] を報告する。

§1 Smaleの予想について

Anosov diffeomorphism の定義を述べる。 Compact多様体
 M 上の diffeomorphism $f \in \text{Diff}(M)$ が Anosov である
とは接束 TM が df で不変な 2つの subbundle E_s, E_u
の Whitney 和であり定数 $C > 0$, $\lambda > 1$ が条件

$$\begin{aligned} \| df^n v \| &\geq C \lambda^n \| v \| \quad \forall v \in E_u \\ \| df^{-n} v \| &\leq C \lambda^{-n} \| v \| \quad \forall v \in E_s \end{aligned} \quad \begin{array}{l} (\| \cdot \| \text{は接ベクトルの長さ}) \\ n \text{ は任意の自然数} \end{array}$$

を満すものが存在する事である。

次の双曲型 infra-nilmanifold diffeomorphism が中心的例

である。 N を連結单連結 Lie 環とし、その左移動と自己同型がなす N の Lie 变換群 $N \rtimes \text{Aut}(N)$ の離散部分群 Γ で

- $(P:P \cap N) < \infty$, ◦ $N/\Gamma \cap N$ は compact
- P の N への作用は free

を満すものを考える。ここで $g = n \circ \psi \in N \rtimes \text{Aut}(N)$ で

$$1) gPg^{-1} = P$$

2) $d\psi \in \text{Aut}(re)$ は双曲型（絶対値 1 の固有値を持たぬ）を満す g が導く Anosov diffeomorphism $\bar{\psi} \in D_{\text{iff}}(P \setminus N)$ を双曲型 infranilmanifold diffeomorphism と呼ぶ（双曲型自己同型を持つ Lie 環 re は nilpotent である [Bo, P.111]）。

述1 $g = n \circ \psi \in D_{\text{iff}}(N)$ の不動点 $n_0 \in N$ の存在が知られていく ([To, P312]) ので g は 双曲型 nilmanifold diffeomorphism $\hat{g}: P \setminus N \ni p'x \rightarrow p'\psi(x) \in P' \setminus W$

$$(P' = n_0(P \cap N)n_0^{-1}, \quad \psi'(x) = n\psi(x)n^{-1})$$

によつて有限に被覆される ($d\psi'$ と $d\psi$ の固有値全体は等)。

Smale の予想とは "任意の Anosov diffeomorphism $f \in D_{\text{iff}}(M)$ に対し、ある双曲型 infranilmanifold diffeomorphism $\bar{\psi} \in D_{\text{iff}}(P \setminus W)$ と同相写像 $h: M \rightarrow P \setminus N$ が存在し

$h \circ f = \bar{g} \circ h$ を満すであろう"といふ予想である。これについて

① Franks - Newhouse の定理 ([Fr], [Ne])

$\dim E_s \text{ or } \dim E_u = 1 \Rightarrow N = \mathbb{R}^n$ で予想は正

② A. Manning の定理

$M = P \setminus N$ (infra-nilmanifold) \Rightarrow 予想は正

が知られていく主な結果である。

注意2 位相共役下で微分共役ではない①の例が

2次元以上の exceptional torus 上で構成されて

いる ([F-T]).

Smale の予想が正しければ, Anosov diffeomorphism の
軌道構造を見るには, 双曲型 infra-nilmanifold diffeo
morphism のそれを見ておけば十分という事になるし, 逆に
があるのなら双曲型 infra-nilmanifold diffeomorphism が
どれだけあるかをある程度正確に言える必要がある。

何れにせよ, Anosov diffeomorphism を持つ infra-nilmanifold
を持つ事は重要である。実際 $P \setminus \mathbb{R}^n$ については
Porteous が調べている ([Po])。そこでは双曲型 nil
manifold diffeomorphism を持つ nilmanifold がどれだけ
あるかを以下の節で述べる (cf. 注意1)

§2. Anosov automorphism の定義と存在の為の必要条件
 nilmanifold N/Γ に対して、 \mathbb{Q} 上の nilpotent Lie 環
 が対応する事と、 N/Γ が Anosov diffeomorphism を持つか
 どうかが、この \mathbb{Q} 上の Lie 環が Anosov automorphism
 を持つ事が同値である事、そして比較的簡単に調べられる
 存在条件について述べる。

又曲型 nilmanifold diffeomorphism $\bar{\psi} \in \overline{\text{Diff}}(N/\Gamma)$
 $(\psi \in \text{Aut}(N))$ が存在とする。微分同相である指数
 写像 $\exp : \pi_\Gamma \rightarrow N$ を使って π_Γ 上で考えると
 $d\psi(\exp^{-1}) = \exp^{-1}\psi, \quad d\psi \in \text{Aut}(\pi_\Gamma)$
 である。 $\exp^{-1}\Gamma$ の \mathbb{Q} -linear span を π_Γ と書くと
 $[\pi_\Gamma, \pi_\Gamma] \subset \pi_\Gamma$ である事、 $\exp^{-1}\Gamma$ の \mathbb{Z} -linear span
 L は π_Γ の格子となる事が知られており ([Ma],[Ra])。
 $d\psi L = L$ だから一般の \mathbb{Q} 上の nilpotent Lie 環 \mathfrak{g}_Γ
 に対する次の定義を行ふ

定義 \mathfrak{g}_Γ の双曲型自己同型 (\mathbb{Q} 上の) ψ が \mathfrak{g}_Γ
 ある格子 L ($\text{rank } L = \dim \mathfrak{g}_\Gamma$ を満足) を保つ時、
 ψ を \mathfrak{g}_Γ の Anosov 自己同型と呼ぶ。

逆に \mathfrak{g}_Q の Anosov automorphism ψ と $\psi L = L \cap \mathfrak{z} L$
 $(\subseteq L)$,

$G_1 = \mathfrak{g}_Q \otimes_{\mathbb{Q}} \mathbb{R}$ における連続单連結 Lie 環。

$T = \exp L$ が生成される G の部分群

$\psi : d\psi = \psi \otimes_{\mathbb{Q}} \mathbb{R}$ なる $\psi \in \text{Aut } G$

とすれば $\bar{\psi} \in \text{Diff}(G/\Gamma)$ は 双曲型 nilmanifold
diffeomorphism である。

2つの nilmanifold $M_i = G_i/\Gamma_i$ ($i=1, 2$) に対しある
nilmanifold M_3 と有限被覆写像 $p_i : M_3 \rightarrow M_i$
($i=1, 2$) が存在する時, M_1 と M_2 は commensurable
と呼ばれる。自然な全单射に対応

{nilmanifold の commensurable class}

$\longleftrightarrow \{\mathbb{Q}\text{上の nilpotent Lie 環の同型類}\}$
が成立。 [Moo, Theorem 2] と [It, Remark 1.4] から
命題1 nilmanifold G/Γ が Anosov diffeo を持つ事
は commensurable な nilmanifold G'/Γ' が持つ事と
同値で, 更に \mathfrak{g} に対する \mathbb{Q} 上の nilpotent Lie 環 \mathfrak{g}'
Anosov automorphism を持つ事と同値である。
が導ける。

以下簡単の為 Lie環 \mathfrak{g} , Subalgebra \mathfrak{h} , 自己同型写像 φ 等は 特に記さぬ限り \mathbb{Q} 上のものをとする。

L と \mathfrak{g} の格子とすると \mathfrak{g} の任意の部分空間 \mathfrak{h} に对于 $L \cap \mathfrak{h}$ は $\mathfrak{h} \cap P(L)$ は $\mathfrak{g}/\mathfrak{h}$ の格子である。

注意2 もしそれ $\mathfrak{g}/\mathfrak{h}$ の \mathbb{R} が irrational を部分空間だと (例 平面上における化夏さが無理数の直系束) $L \cap \mathfrak{h}$ は \mathfrak{h} の格子とはならぬ。

従って次の補題が成立する

補題3 $\mathfrak{h} \supset \mathfrak{h}'$: \mathfrak{g} の特性Subalgebra.
(任意の自己同型で保たれるideal)

$\varphi \in \text{Aut } \mathfrak{g}$ 且 Anosov $\Rightarrow \varphi|_{\mathfrak{h}} \text{ は } \mathfrak{h}/\mathfrak{h}' \text{ の Anosov automorphism を導く。}$

次に L を 任意の特性Subalgebra 且 \exists 有限集合族 $\{\mathfrak{h}_i\}$ とすると, $\varphi \in \text{Aut } \mathfrak{g}$ 且 Anosov なら φ は 実代数群

$$SA(\mathfrak{g}/\mathfrak{h}) = \left\{ \varphi \in \text{Aut}(\mathfrak{g}/\mathfrak{h}) \mid (\det_{\mathbb{Q}} \varphi|_{\mathfrak{h}_i})^2 = 1 \text{ for } i \in I \right\}$$

に含まれている事が判る。実代数群の連結成分が有限

な事([Mos])と、簡単な考察により次の命題が導ける

命題4 ([It]) \mathfrak{g} の微分環 $\text{Der } \mathfrak{g}$ の subalgebra
 $\text{SD}(\mathfrak{g})$ を

$$\text{SD}(\mathfrak{g}) = \{ D \in \text{Der } \mathfrak{g} \mid \text{Tr}(D|_{\mathfrak{g}}) = 0 \text{ for } f_g \in \mathcal{L} \}$$

で定義する。 \mathfrak{g} の特性 subalgebra $f_g \supset f_g'$ から生ずる $\text{SD}(\mathfrak{g})$ の f_g/f_g' への自然な表現を P と記すと P が $-^t P$ が f_g/f_g' 上に(同時に) 固有ベクトルを持つては \mathfrak{g} は Anosov automorphism を持つたね。
 $t_2 t_2 \cdots t^n$ は f_g/f_g' の適当な基底に対する P の行列表示の転置を表す。

注意5 nilpotent Lie 環 \mathfrak{g} の特性 sub algebra の例としては \mathfrak{g} との交換子環を取ることで生ずる lower central series の外に次の2系列 $\{f_i\}$ がある。

$$\mathfrak{J} = \text{ad } \mathfrak{g} \text{ or } \{ D \in \text{Der } \mathfrak{g} \mid \text{Tr } DD' = 0 \text{ for } {}^t D \in \text{Der } \mathfrak{g} \}$$

$$f_1 = \{ X \in \mathfrak{g} \mid DX = 0 \text{ for } {}^t D \in \mathfrak{J} \}$$

$$f_{i+1} = P_i^{-1} \{ X + f_i \in \mathfrak{g}/f_i \mid DX \in f_i \text{ for } {}^t D \in \mathfrak{J} \}$$

$$(P_i : \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{g}/f_i).$$

$$\mathfrak{J} = \text{ad } \mathfrak{g} \text{ で } f_i \text{ 方にに対する ascending central series } (=$$

含むせて \mathfrak{g} の basis を選ぶと (以上定義された) 実代数群 $\text{Aut}(\mathfrak{g}_{\mathbb{R}})$ の Chevalley 分解を自然に (アーロンク diagonal な部分群が極大完約部分群 F) 得る。 \mathfrak{g} が Anosov automorphism を持つ事と $F \cap GL(n, \mathbb{Z})$ が 双曲型の元を持つ事は 同値である。(Chevalley 分解については [Ra, PII] を参照。)

§3. 具体例。

この節でも何も記さなければ 基礎體は \mathbb{Q} とする。 Anosov automorphism を持つ Lie 環の例を 2 種挙げる。

オ一は \mathbb{Q}^n ($n \geq 2$) の拡張で, free 在 k -step nilpotent Lie 環 $rc_k(\mathbb{Q}^n)$ ($k, n \in \mathbb{N}, k < n$) である。たとえば $rc_k(\mathbb{Q}^n)$ は \mathbb{Q}^n の basis $\{e_1, \dots, e_n\}$ に対する長さ k 以下の words $[e_{i_1}, [e_{i_2}, \dots [e_{i_{j-1}}, e_{i_j}] \dots]]$ ($j \leq k$) から張られるベクトル空間にアーロンクする。

• 正対称. • Jacobi恒等式. • $k+1$ 回以上は 0 のみを交換関係とするよう定義した Lie 環である。

Hirsch の補題 ([F-T, Lemma 1]) を使って具体的に

Words の \mathbb{Z} -span がなす、格子を不变にする Anosov automorphism の存在を示せる。

注意 1 論文 [A-S] では $\text{rc}_k(\mathbb{Q}^n)$ が k -step nilpotent Lie 環全体の中で "universality" を持つ事を用いて以下の定理を示している。check すべき条件が多く、具体的な計算は困難と思える。
また $\text{rc}_k(\mathbb{Q}^n)$ ($k \geq m$) は Anosov automorphism を持つ。 ([It, Proposition 3.1])

オニの例は Borel-Smale の例 ([Sm, p. 262]) の一般化 ([It, Proposition 3.2]) である。この構成法で得られる例は素数でない次元にありこれは豊富にあるのであるが、 $(\text{rc}^3 \otimes \mathbb{R}) \oplus (\text{rc}^3 \otimes \mathbb{R})$ の非自明な組構造 (\mathbb{R} へ係数拡大してこれが実 Lie 環となるような \mathbb{R} 上の Lie 環) の例である事に限って説明する。たとえ $(\text{rc}^3 = \langle e_1, e_2, e_3 \rangle_{\mathbb{Q}})$ は

$$[e_1, e_2] = e_3, [e_i, e_3] = 0 \quad (i=1,2)$$

で決まる 3 次元 Heisenberg Lie 環である。

K を実 2 次 Galois 扩大とする。既に

$$\mathbb{K} = \mathbb{Q}(\sqrt{m}) \quad (m \in N, \text{ 平方因子を持たぬ})$$

と書ける。 \mathbb{K} の代数的整数全体 $\mathcal{O}_{\mathbb{K}}$ は

$$\mathcal{O}_{\mathbb{K}} = \left\{ \frac{a+b\sqrt{m}}{2} \mid a, b \in \mathbb{Z}, a-b \equiv 0 \pmod{2} \right\} \cdots m \equiv 1 \pmod{4}$$

$$\mathcal{O}_{\mathbb{K}} = \left\{ a+b\sqrt{m} \mid a, b \in \mathbb{Z} \right\} \cdots m \equiv 2 \text{ or } 3 \pmod{4}$$

である。 $\mathbb{H}^3 \otimes \mathbb{K} \supset \mathbb{H}_\mathbb{Z}^3 \otimes \mathcal{O}_{\mathbb{K}}$ ($\mathbb{H}_\mathbb{Z}^3 = \langle e_1, e_2, e_3 \rangle_\mathbb{Z}$) であるが

$$\dim \mathbb{H}^3 \otimes \mathbb{K} = 6, \text{ rank } \mathbb{H}_\mathbb{Z}^3 \otimes \mathcal{O}_{\mathbb{K}} = 6$$

なので、 \mathbb{K} の Galois 変換 σ ($\sigma \neq 1$) を使い diagonal (= $(\mathbb{H}^3 \otimes \mathbb{R}) \oplus (\mathbb{H}^3 \otimes \mathbb{R})$) の中に次のように入り込ませる。

$$\mathcal{G}' = \left\{ (X, X^\sigma) \mid X = \sum_{i=1}^3 (a_i + b_i \sqrt{m}) e_i \quad (a_i, b_i \in \mathbb{Q}) \right\}$$

$$L' = \left\{ (X, X^\sigma) \mid X = \sum x_i e_i, (x_i \in \mathcal{O}_{\mathbb{K}}) \right\}$$

すると L' は $(\mathbb{H}^3 \otimes \mathbb{R}) \oplus (\mathbb{H}^3 \otimes \mathbb{R}) = \mathcal{G}' \otimes \mathbb{R}$ において

格子である事が (\mathbb{K}/\mathbb{Q}) の判別式を $D_{\mathbb{K}}$ とすると

$$\sqrt{D_{\mathbb{K}}} \neq 0 \text{ (つまり) } \text{判別式}.$$

一方 Dirichlet の单数定理より 单数群 $\mathcal{O}_{\mathbb{K}}^\times$ の rank は 1 であり \mathbb{K} 上の Lie 環 $\mathbb{H}^3 \otimes \mathbb{K}$ の双单型自己同型

$$\varphi = \begin{pmatrix} \eta_1 & 0 & 0 \\ 0 & \eta_2 & 0 \\ 0 & 0 & \eta_1 \eta_2 \end{pmatrix} \in \text{Aut}(\mathbb{H}^3 \otimes \mathbb{K}) \cap \text{GL}(3, \mathcal{O}_{\mathbb{K}})$$

が十分存在し φ も 同様の性質を持つ。そこで

$$\varphi' = (\varphi, \varphi^{\sigma})$$

とすれば " φ' は L' を保つ Anosov automorphism である。

注意2. 一般の nilpotent Lie 環 \mathfrak{g} における二つの構成法の仮定が満たされぬ場合がある。例は \mathfrak{g} が特異性中零 ($[B_0, P] = 0$) なら 双曲型自己同型を満たない。したがって $\text{Per}(\mathfrak{g} \otimes R)$ が \mathbb{Q} 上で角化される非退化行列を持つには 全ての $d \geq 2$ に渡り $\mathfrak{g} \oplus \cdots \oplus \mathfrak{g}$ は Anosov automorphism を持つ事が容易に判る。この条件は筆者の知る大部分の nilpotent Lie 環で満たされてる。

§4. 低次元における分類

§3 のオーネーの例で \mathbb{Q}^n ($n \geq 2$) 以外の Lie 環 \mathfrak{h} が表されるのは $\dim \text{re}_k(\mathbb{Q}^n) \geq \dim \text{re}_2(\mathbb{Q}^3) = 6$ である。オニの例でも 非自明 nilpotent Lie 環の次元最小のものが 3 次元 Heisenberg Lie 環 \mathfrak{h}^3 である事から 6 次元以上となる。そこで 6 次元以下の nilpotent Lie 環で Anosov automorphism を持つものとそれ以外のものを問題とする。まず 2 次元

たものにつまるといふのが $[It]$ の結果である。証明

命題1 5次元以下の infra-nil-manifold ΔG で Anosov diffeo を持つものは $G = \mathbb{R}^n$ ($n \geq 2$) に限る。(従, 乙 [Po, §8] に述べられるものに限る。
特に 3 次元までは torus しかなし)

定理2 6 次元の nil-manifold で Anosov diffeo morphism を持つものは対応する Lie 環を述べると

$$\mathbb{Q}^6$$

$$TC_2(\mathbb{Q}^3)$$

$$\mathfrak{g}'(m) \quad (m=2, 3, 5, 6, \dots \text{ 平方因子を除く自然数})$$

に限る。これらは互いに commensurable でない。
($m \neq m' \Rightarrow \mathfrak{g}'(m) \not\cong \mathfrak{g}'(m')$)

証明は、lower central series の次元に対する
考察と 0 でない交換関係が少くなる F の basis
を使つて Derivation algebra の決定 の後に
§2. 命題4を適用すると(1)が立て行つ。

注意3 特殊な Subalgebra $\mathfrak{g} \subset \mathfrak{g}'$ で $\dim \mathfrak{g}/\mathfrak{g}' = 1$
を満すものがあれば §2. 命題4より \mathfrak{g} は Anosov

automorphism Σ が存在しない事がある。この事で Σ の
nilpotent Lie 環が除外される。

注意 注意 3 によると特徴 Subalgebra Σ と
Anosov automorphism Γ 存在 (12(c))。実際 7 次元
でも Anosov automorphism Σ が Γ 2-step で
 $\dim [g, g] = 2 \text{ or } 3$ で 非自明 特徴部分環 Σ
 $[g, g]$ のみで可子事が必要とされる。

References.

- [A-S] : L. Auslander and J. Scheuneman, On certain automorphisms of nilpotent Lie groups
Proc. Symp. pure Math. 14 (1970) 9-15
- [Bo] : N. Bourbaki, 原論. II-環 (1巻) 東京図書 1960
- [F-J] : F.T. Farrell and L.E. Jones, Anosov diffeomorphisms constructed from $\pi_1 \text{Diff}(S^n)$, Topology 17 (1978), 273-282
- [Fr] : J. Franks, Anosov diffeomorphisms,
Proc. Symp. pure Math. 61-93
- [It] : K. Ito, Classification of nilmanifolds M^n ($n \leq 6$)
admitting Anosov diffeomorphisms, to appear.

- [Mal]: A. Mal'cev, On a class of homogeneous spaces,
Amer. Math. Soc. Transl. ser.1. vol.9 (1962) 276-307.
- [Man]: A. Manning, There are no new Anosov
diffeomorphisms on tori, Amer. J. Math. 96
(1974), 422-429.
- [Moo]: C.C. Moore, Decomposition of unitary representations defined by discrete subgroups of nilpotent groups, Ann. of Math. (2) 82 (1965) 146-182
- [Mos]: G.D. Mostow, Fundamental groups of homogeneous spaces, Ann. of Math. 66 (1957), 249-255
- [Ne]: S.E. Newhouse, On codimension one Anosov
diffeomorphisms, Amer. J. Math. 92 (1970), 761-770.
- [Ni]: Z. Nitecki, Differential Dynamics, The M.I.T.
Press, Cambridge, Mass., 1971
- [Po]: H.L. Porteous, Anosov diffeomorphisms of flat
manifolds, Topology 11 (1972) 307-315
- [Ra]: M.S. Raghunathan, Discrete subgroups of Lie
groups, Springer 1972.

[To]: P. Tomter, Anosov flows on infra homogeneous
spaces, Proc. Symp. pure Math 14 (1970) 299-327